

「昭和天皇がご指摘になった地図の誤り」

さて、シリーズの最初、それも天皇陛下のことを取り上げるとなると、少々緊張します。

大正3年(1913)のことです。京阪電鉄の電車に乗り合わせた皇太子時代の昭和天皇が、車内に掲げられていた「京阪電車御案内(地図)」にすっかりほれ込み、「きれいでわかりやすいので、東京の級友に持ち帰りたい」と、お話になったといひます。それを聞いた同鉄道会社では、早速その地図を数部用意し、お持ち帰りいただいたそうです。

この地図の製作者は、鳥瞰図師として有名な吉田初三郎氏です。

こののち彼の元には、全国各地から仕事が舞い込むと同時に、皇室との係わりもできたようです。大正4年には天皇の即位式との係わりで「京都全市鳥瞰図」を描き、大正11年には皇太子の四国御巡遊に随行することになり、先々で鳥瞰図を作製しました。このような出来事からも、昭和天皇は少なからず地図に興味をお持ちになっていたと思われまふ。

そして、昭和40年のこと、那須の御用邸でお過ごしになっていた天皇陛下。植物調査との関連で1/50,000地形図を広げられていました。そのとき偶然並べられていた古い地形図と新しい地形図で、二つの山の名前の記載に入れ替わりがあることに気づかれました。共に確認された侍従は、早速事務方を通して国土地理院に連絡したようです。

「『同じ、国土地理院の地図なのに、左右二つの山の名前はどのようにして入れ替わっているの?』と、昭和天皇がご指摘になられました」とでも申したのでしょうか。

陛下直々のご指摘ということで、国土地理院では上を下への大騒ぎとなったのではないのでしょうか。狼狽ぶりというか、対応の様子が目には浮かびます。

当時の担当者の話では、担当課では早々に資料を調べ、さらに現地に赴き地元の役所などで、詳細かつ慎重な調査をしたそうです。

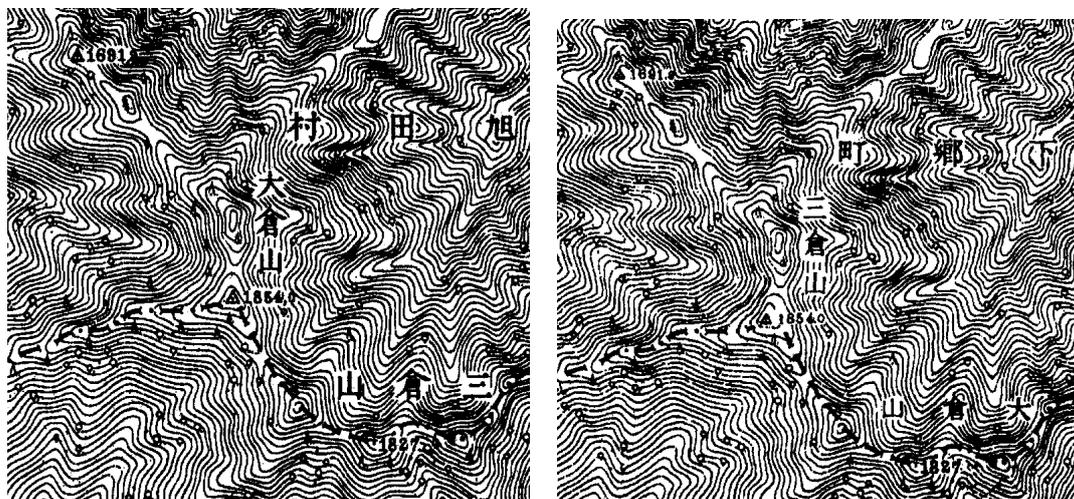
その結果、新版図の記載には、誤りがないと分かって担当者は胸をなで下ろし、そのことは速やかに宮内庁に報告され、その経緯は、侍従を通じて陛下にもお伝えされ、一件落着したということ。

内容的には、未踏の地域が未だ多くあった明治・大正時代の地形図にはよく見られる、左右の山名の取り違えといったもの。

それを修正測量に伴い正しく訂正したもので、指摘のあった地形図は「那須岳」、山名は「大倉山」と「三倉山」です。明治42年測図のものと、昭和33年修正の地形図で見比べるとわかります。

ところが、これには後日談があります。それから30年以上も経った平成5年のこと、黒磯市は「旧来の位置で山名を呼んでいますから。元に戻してほしい」と、国土地理院に申し出たそうです。しかし、これまでの経緯を知る外野席からの、「このことは、昭和天皇が

ご指摘になったことですよ。それでも？」との忠告に、すっかり意気消沈したのだとか。



「那須岳」(明治42年測図) 1/50,000 地形図、右は同(昭和33年修正)

【参考文献】

「山と溪谷」昭和41年4月号 No. 328 「陛下が御指摘になった地図のミス」小俣幸太郎
地形図は、国土地理院発行のものを使用しました。

「吉田初三郎ゆかりの桃太郎神社」

前回紹介したように、吉田初三郎の描く鳥瞰図は昭和天皇にも愛されました。優れたデフォルメと独特の視点を持つそれは、全国各地の観光名所などに登場して、多くの市民にも注目されました。その鳥瞰図師吉田初三郎が、桃太郎神社の創建に深く係わったというお話です。

皇太子（のちの昭和天皇）との出会いをきっかけとして順調に仕事を続けてきた初三郎でしたが、大正12年の関東大震災で東京の自宅を焼け出されました。そのとき、ある人の紹介を受けて日本ライン（木曾川）近くに居を移したのです。

初三郎は、その住まいの近くに「鬼が島」や「猿洞」「雉が棚」といった地名が存在していたことなどから「ここが、桃太郎伝説発祥の地である」と確信し、日本中にそれを宣伝してまわったといえます。

昭和4年になると「桃太郎会」といったものを発会し、昭和5年には桃太郎神社の創設準備を始めました。その後、多少の紆余曲折がありましたが、同年秋には、桃太郎神社を創建。自ら「日本一桃太郎会」会長に就任し、地元と協力して「日本一の桃太郎祭り」を催しました。また、翌年の祭りには、愛息が桃太郎に扮して武者行列に加わり、その列は犬山の町から長良川を川舟で渡り桃太郎港といったものを経て、同神社までを練り歩いたそうです。

初三郎、なぜこんなに桃太郎神社に力を入れ、こだわったのでしょうか。

全国各地、いや中国や朝鮮までも足を運び鳥瞰図製作に力を注いでいた初三郎ですが、観光や鉄道旅行との係わりの中にいるうちに、ごく自然に観光イベントの実施などにも関心を持つようになっていたようです。そして、あの日本ライン近くへの転居は、のちに名古屋鉄道社長になる方の好意を受けたものでした。そのことに応える意味のイベント開催であったのかもしれませんが。もちろん、時代背景から考えれば戦意高揚などのこともあって、皆が桃太郎という強い味方に憧れていたのでしょう。そして、周辺の地名のこと、それらが交ぜになってのことと思われる。

桃太郎神社は、今も愛知県犬山市栗栖字古屋敷にあります。もちろん、桃太郎伝説は岡山や高松にもあり、桃太郎神社は、香川県高松市鬼無町にもあります。



吉田初三郎

「石田三成ゆかりの“ものさし”」

地図作りの目的の一つは、支配者が土地を管理し、税金を徴収するためであって、そのための測量のことを「検地」といいます。日本で最初に統一基準による「検地」が全国的に行われたのは、社会科の教科書に必ず出てくる、あの豊臣秀吉による太閤検地（1592～1596）です。

検地には、現在のポールにあたる梵天竹（ぼんてんたけ）、巻尺にあたる水縄、直角定規にあたる十字といったものが使用され、結果としては、土地の一区画ごとの地名や地目、等級、面積、石高、耕作者名などが記載された検地帳（水帳）というものが作成されます。

簡単に言えば、誰がどのような価値を持つ土地を持っているかといったことを記したものです。この検地帳、役人と農民の連判したものが二部作成されて、一部は名主へ、他は勘定所に納められ、田畑、屋敷地などを生産力に格付けして米の石高に換算し、これを基に徴税が行われます。

さて、鹿児島市の磯庭園にある尚古集成館には、文禄3年（1594）に秀吉の命を受けた石田三成が島津領検地の際に使用したといわれる“ものさし”が所蔵され、展示されています。

太閤検地は、石田三成と細川幽齋に命じられたといい、島津氏の領内は文禄3年から4年にかけて石田の下で実施されました。石田三成が農政などで残したものとしては、五人組制度がすぐにあげられますが、地味ながら重要な検地という仕事でも成果をあげたようです。

残された検地尺は、上質の柾目桧板製で、表には墨による2個の×印があり、その間で1尺の長さを表示しています。さらに1寸ごとの目盛りがあって、石田三成（治少輔）の署名と花押もあります。

裏には、「この寸をもって、六尺三寸を壱間にあい定め候て、五間に六十間を壱反に仕るべく候なり」と添え書きがあります。

“ものさし”ひとつで、土地は広くもなり狭くもなり、石高や年貢を左右する大事なものです。この年、ここにもあるようにこの尺を基準にし、一間を六尺三寸と決めて事業を進めました。この尺は、太閤検地尺として現存する唯一のものであり、国指定重要文化財になっています。売店では、3分の2に縮めた複製尺も販売されていますから、文化財を手にとって確かめる？ことができます。

太閤検地の後は、明治期の土地台帳作成に引き続き、現在では地籍測量が続けられていますが、大都市では遅々として進んでいません（全国で50%弱の実施率）。そのためもあって、六本木ヒルズ地区の再開発では、土地境界画定のために長期間を要したことが関係者には良く知られています。

高度な科学技術を習得している現代の私たちですが、このことでは秀吉に負けているようです。



ものさし、尚古集成館

「豊臣秀吉ゆかりの“ものさし”」

明治期の新聞によると、西郷隆盛が西南戦争末期に立てこもった洞窟には、物らしきものは何一つ残されていなかったのですが、欧米諸国が見える世界地図が一部残されていたそうです。官軍と苦しい戦いの最中、西郷はこの地図を肌身離さず持ち歩き、暇があればこれを開き、頷いていたといいます。彼は世界地図から何を讀もうとしていたのでしょうか。

かの織田信長は、イエズス会の宣教師から献上された地球儀や地図を愛用していたと言われています。そして、世界は丸い球のようなものだという点について、概ね理解を示していたとも言われます。そのことはともかく、彼は地球儀とそこに描かれたちっぽけな日本に何を感じていたのでしょうか。

そして、豊臣秀吉は「三国地図扇面」という扇の面に三つの国が描かれたものを愛用していました。

その国々は、日本と中国と朝鮮です。地図を見た天下人秀吉が海外に思いをはせ、覇権を握る夢をみたのかもしれませんが。

それ以前に、秀吉は博多に良いものを残しました。博多駅から博多港まで伸びる「大博通り（たいはくどおり）」とその周辺の町並みです（1587年）。

彼は、このときすでに将来の朝鮮出兵を頭に描いていたようです。将来の繁栄を見据えた「大博通り」周辺の区画は、豊臣秀吉の手による町割、「太閤町割」によるものです。ここでの「町割」とは、現在の都市計画といったもので、既存の町を新たに区割りしなおし、さらに武士と町民の混在居住を避けるなど、今で言うところの用途区分の設定といったことも実施しました。町の再興にあたっては、それまでの歴史や地理的特徴を調べ上げ、その結果から、唐船が着く海辺から大宰府（大宰府政庁を指す）に通じる南北の道を広くしたのだといわれます。秀吉は、もちろん城攻めや築城に能力を発揮しましたが、検地や都市計画にも功績を残したのです。

さて、そのとき協力したのが豪商神屋宗湛（かみやそうたん：1553-1635）でした。彼もまた、かつての町並みの跡や井戸を探し、自ら測量するなど太閤の町割に協力しました。その宗湛が使用した長さ2メートルほどの間杖（けんじょう）が、戦前まで宗湛を祀った豊国神社に保存されていたのですが、残念ながら焼失しました。

そのときに使われた“ものさし”の複製が、櫛田神社・博多歴史館にあります。そこからは、「博多津町割」と記された文字が読めます。

ということで、間接的ながらも豊臣秀吉ゆかりの“ものさし”が、ここにも残っています。今回は、「検地（現在の地籍測量）」ということで、私たちは秀吉にも負けているというお話でした。都市計画、町づくりということではどうなのでしょう。

★太宰府と大宰府

「太宰府」は行政名、あるいは場所を示す場合に用いられます。

「大宰府」は大宰府政庁、歴史的な建造物や事柄などを示す場合に用いられます。



「三国地図扇面」(複製、「ゼンリン地図の資料館」)

「シーボルトの花とピアノと髪と」

シーボルト（1796-1866）といえば、江戸時代に長崎・出島のオランダ商館に勤めた医師で、御禁制の地図を持ち出し、日本を追放になった事件を想起するのは、地図屋のサガでしょうか。やはり一番有名な話だと思いますが、ここでは、地図とは係わりのないエピソードをいくつか紹介します。

・ シーボルトと花

シーボルトが西洋にアジサイを紹介し、愛する「おたきさん」にちなんで学名にハイドラングア・オタクサと命名したことは有名です（もっとも西洋に最初に紹介したのは、それ以前と同じオランダ商館医師ケンペル（1651-1716）であったといわれています）。

彼らは、商館長の将軍謁見に同行する道すがら各地を見聞し、日本を世界に紹介しました。もちろん、「見聞記」をまとめるには、あらゆるものへ興味を持つことが大切です。その中で、植物の採集も積極的に行いました。

彼らは出島に植物園を開きました。シーボルトのとき、ここで栽培された植物は最大1400種を数えたといえます。アジサイのことはよく知られていますが、そのほかに、ウメ、ツバキ、ヤマブキ、ハナショウブ、シュウカイドウ、サザンカなども彼によって紹介されました。彼は、日本地図と東洋文化だけでなく、長い航海をともにした多くの草花の標本や種子も持ち帰りました。そして、あるものはその後のヨーロッパの園芸界を席卷したように、彼の頭の中には種子戦略といったことが既に描かれていたように思われます。

・ シーボルトとピアノ

彼は、かなりの音楽的能力も持ち合わせていました。

シーボルトは日本滞在中に、ピアノ曲「日本のメロディー」を作曲していました。それは、日本で生まれた西洋の手法によるクラシック音楽の第一号の荣誉を持つものです。「日本のメロディー」は、7曲からなり、その第4が「かつぼれ」から採譜されたものであることが、旋律の下に書き込まれた歌詞などから明らかになりました。

彼は、来日時にピアノを持ち込んでいます。それは、最新技術の紹介ということだったのででしょうか。それとも、自身の楽しみのためだったのででしょうか。いずれにしても、当時の輸送事情などを考えると並々ならぬものを感じます。

そのピアノは、当時親交のあった山口県萩市の熊谷家に贈られ、それは今も保存され、時折当時の音色を伝えているということです。

・ シーボルトの髪

ドイツの医師の家系に生まれた彼は、ヴェルツブルク大学で医学と博物学を学びました。その時、大学にはデルリングルという有名な解剖学教授がいて、彼は師の家に寄宿していました。その後大学を卒業し、1823年27歳の時に長崎に着任するのですが、その時彼の懐には、紙に包まれたデルリングル教授の頭髪がありました。遠い東洋の国を目指すこと

への覚悟、あるいは意気込みというものが感じられます。

そして、日本滞在中には「おたきさん」がいて、二人の間には、「おいね」が生まれました。

彼の事件が起き、厳しい取り調べの後、1830年に国外追放となります。「おいね」二歳八か月の時です。この時シーボルトは、漆塗りの小篭を作り、蓋の表に「おたき」の、裏面に「おいね」の姿を貝象眼させ、さらに母子の頭髪を紙に包んで持ち帰ったといわれています。

「おたき」の毛髪は羽織の紐のように編まれたもの、「おいね」のそれは、一見して混血と分かる茶褐色のものだといわれています。また、彼は懇意にしていた最上徳内、間宮林蔵の両名にも、自身の髪を抜き瑠璃の器に入れて形見として渡したという話もあります。

花・ピアノ・髪、どれにも、さすが博物学者と思わせるシーボルトの“こだわり”が感じられます。



アジサイ



シーボルト記念館

「松浦武四郎の小さな庵」

伊勢の人松浦武四郎（1818-1888）は、幼少のころから遊歴を繰り返し、27歳のころからは蝦夷地を探検して「東西蝦夷山川地理取調図」（全28枚）などの詳細な地図を作成し、「東西蝦夷日誌」などの多くの蝦夷日誌を著したことはよく知られています。特に、「東西蝦夷山川地理取調図」は、主に海岸線だけの調査であった「伊能図」を補い、内陸の詳細な河川名・地名が記入されています。

それまでの松浦はというと、10歳のころから諸国遍歴の志を抱くようになり、天保4年（1833）には江戸に出て（家出といったもの）、これを実行に移し、17歳の時からわずか4年間で日本全国の名跡、山岳などをくまなく回るなど、根っからの旅行家であり、探検家ともいえます。

明治政府が樹立されると蝦夷地御用掛、開拓地判官に就きますが、探検家松浦は3年もしないうちに「高齢で現地に赴くことも適わない身であるから」といって、官を辞退します（52歳）。

それなのに、吉野連山や九州遊歴などを続け、68歳になってから大台ヶ原を3回踏破し、70歳になってからも富士登山に挑戦するなど、登山や旅に明け暮れる毎日でした。あの「高齢」は、どこにいったのでしょうか。

それはそれとして、明治政府の役職から離れてまもなくの明治6年55歳のとき、彼は神田五軒町（現在の外神田、「神田明神」の周辺）に新居を構えました。そして、明治19年になると、その家の一隅に一畳間書斎といったものを建て増しました。この小さな部屋を造るに当たって、古色溢れた寺院の古材を柱に、日焼けした神社の板切れを床の間板へと使用したのだそうです。それは、奈良春日大社、駿州久能山稻荷社、伊勢山田外宮、西京東山東福寺仏殿ほか多数の神社仏閣の由緒ある古材でした。

リサイクルショップなどのない時代に、そうした各地の古材をどうやって集めたのでしょうか。

それは、諸国遊歴で知り合った各地の友から贈られたものだといいます。古材収集癖がある？ということ、友人らが知っていたということでしょうか。探検家松浦は、全国に広がる確かなネットワークを持っていたようです。

晩年は、古銭蒐集や考古学にも関心を寄せていたといいますから、この日向の一隅で古銭を広げ、書をめくっては過ごしたのでしょうか。そして、柱の一本、壁板の一枚に目やっては、各地に住まいする旧友のことを思い出していたのです。

命尽きたときは、この古色蒼然とした木材で亡骸を焼き、遺骨を大台ヶ原に遣ってほしいと言いつ残したといいます。だが、子息は父の形見として一畳敷書斎を大切に保存しました。その後、その小さな庵は武四郎の遊歴を思わせるように港区の徳川邸から、数回の移転を経て、三鷹のある実業家の別荘へと旅をして、東京都三鷹市にある国際基督教大学の敷地内に移築されて、国の登録文化財として残っています。

亡骸のことは、大台ヶ原山の名古屋谷に分骨碑が建てられていますから、その遺志は半ば適えられたようです。



神田五軒町松浦武四郎宅付近（赤枠部分に「松浦忠四郎」の文字が見えるが？）

「江戸切絵図集」ちくま学芸文庫より